

## エッセー

## 部落学としての考察

川元 祥一

## はじめに

全学共通カリキュラムにおいて一九九八年に始まった科目「人権とマイノリティ」はこの国、厳密には和人社会で今も解決したとはいえない社会問題で、重要な人権問題と考えられる部落問題をテーマにしてきた。なお二〇〇一年より科目名を「日本文化の周縁」としテーマを「部落学」とした。私はこの「部落学」が正規の科目名になるのを期待するし、大切な課題と考える。本稿はその理由を述べることになるだろう。

部落問題は少数者の被害・被差別が話題になりがちであるが、被害をもたらす原因、加害の問題性を考えると決してマイノリティの問題ではない。つまり社会全体で考えなくてはならない問題であり、課題なのだ。そうした観点に立って、このテーマを授業でどのように展開してきたかということと、今後の大学教育について私の考えを提案したい。

## 1. 問題を解く努力

部落問題を科学的に考察しよう。こうした発想を私は長年提案してきた。部落問題といえばこれまで多くの場合「部落差別」が話題であり、それをどのように克服するかが課題であった。差別は今も現実的なもので目を逸らせてはならないが、それは差別に集約して終わりではない。この問題には、それを「問題」として成り立たせる主要な要素

がある。そうした要素を考えると、極平凡な意味で、「問題」を解く志向とか努力が生まれるだろう、と考える。しかし問題が長く続いているのに、それを解こうとする動きが教育界や思想・文化の世界でなぜ一般的でないのか、そうした思いが私の脳裏にある。同時にまた、そのように思う私自身が、非力であっても、解答を求めて頑張ってみようと思う。その志向がタイトルにある部落学の第一歩だ。科学的考察を進めることで偏見・差別が克服できる。そのことも確信する。

こうした第一歩はさまざまな人から多様な形で始まってよいと思う。立教大学は、ある研究者（以下K氏）による差別的な講演が学生によって告発され、そのとき偏見・差別の対象となった東京の食肉市場の労働者・芝浦屠場労働組合と、この国・和人社会でその職場の歴史的前提となる部落問題を解決する部落解放同盟品川支部から糾弾され、そのことでK氏と学校側が差別に気づいて反省した。これがきっかけで第一歩が始まる。そして先の科目が始まり私が非常勤講師として担当した。

こうした第一歩も大切と思うし同じ例は全国に多い。しかし理想的なことをいうなら、糾弾がなくても問題を解決する姿勢や動きが大学側にあるべきではないか。私が「部落問題を科学的に考察しよう」というのはそうした姿勢のことだ。

この時点で考えることは、その必要を感じるかどうかだ。多分多くの場合必要性を感じないから放置していると

思うが、糾弾されて差別に気づき反省したことからして、しかも同じ事例が全国に多い例を考えると、差別と糾弾が偶然の出来事ではなく、一定の必然性、歴史や社会構造、つまり部落問題が背景にあるのはすぐわかる。それでも糾弾がないと何もしない。そうした姿勢が私には納得できない。まさか「脱亜入欧」的に、他人が解決したものを模倣する姿勢が今も生きていたというわけではないだろう。

ともあれ、いかなる歴史・事情であろうと、自分たちの間にある問題は自分達で思考し解決する。そうした学問的姿勢が、何の前提もなく常識であり重要だ。

## 2. 差別の現実と講義の内容

K氏による差別講義の内容を概略しておきたい（以下は一九九七年第一歩の一つとして大学が発行した『部落問題とは何か』より）。

一九九六年の学生部セミナー「環境と生命Ⅶ」の公開講演会「飽食の病理～実力派面白農民からのメッセージ」において、K氏は経済のグローバル化に対抗し農業の可能性を語った。その中で彼は肉食について、人は肉をあまり食べてはいけないとし、その理由について牛や豚が「殺される時に断末魔の叫びを上げるわけでしょう。（略）その断末魔と恐怖が肉に入る」その肉を食べて「本当に命を養えるか」「おそらく人間の命を養うことにはならない」「日本には屠畜場があります。たとえば芝浦屠場。そこではみんながわかっていて、（断末魔のこと。筆者注）みんなが秘密にしている」「屠殺されて出てきた内臓の大半は使い物にならない」などだ。ここにはあきらかな事実誤認と歪曲がある。しかも彼は肉をよく食べている。

こうした・発想・発言に科学的思考があるとは思えない。ここにあるのは偏見と、歴史的につくられた部落差別の社会的・精神的構造が無意識の中に組み込まれている姿だ。しかしK氏および学生部はそれが偏見・差別であるのに気づかずセミナーの報告書をつくり学内、関係者に配布した。一人の学生が差別に気づき告発したのだ。この学生の認識と勇気をたたえたい。

部落差別は今も根深い。典型的なのは結婚差別だ。一九九三年政府が実施した意識調査によると、自分の子が被差別者と結婚すると言った時の親の態度として①「絶対に結婚を認めない」五％。②「家族の者や親戚の反対があれば結婚を認めない」七・七％、③「親としては反対するが、子どもの意志が強ければしかたがない」四十一％である（『転換期を迎えた同和問題』総務庁長官官房地域改善対策室・監修）。③は親として被差別部落の人との結婚に反対しているのである。そのうえで、①②③を合わせると五十三・七％が反対、もしくは消極的である。

K氏の偏見も含め、ここにある現実是非常に深刻と思うが、この大学関係者はどう思うだろうか。少なくとも、学術的機関としての大学関係者は、なぜこうした現実があるのか関心を向け、そこにある問題の答えを求めるシステムを設置する、そうした志向があつてよいのではなからうか。そうでないと、この国の民主主義は実現しがたいと思うが、どうだろうか。

## 3. 科学としての主要な要素

部落問題を科学的に考察する要素の一部を示したい。

それは江戸時代の「穢多・非人身分」を成り立たせる社会的構造から始まる。これを私は社会構成体として考察すべ

きと考える。

この構成体の中に差別観を成り立たせる要素があると共に「穢多・非人身分」が社会的に形成され、あるいは彼らが生活するために必要な生産、または労働活動、社会的関係、あるいは労働形態がある。

このような形態や関係性がないといかなる身分も人も社会的存在が成立しないだろう。それらはどんなものか。そうした社会科学が必要になる。そしてまた、その関係性、あるいは形態での労働から、文化が生まれているのがわかる。わかりやすい例を挙げれば「穢多・非人身分」による皮革の生産・労働によって「和太鼓」が作られており、これは今も昔もこの国の、なくてはならない文化領域にある。私がいう文化とはそうしたものだ。他に、歌舞伎などが関連するのは、漠然としてではあるが結構語られる。実態はどうなのか。

太鼓は牛革を張るが、江戸時代の牛革の生産関係、生産手段の所有形態はどうだったのか。この形態が存在しないということもありえない。また、当時の農民などの生産手段とその所有形態との関連はどうなのか。少なくとも牛皮は当時農民の役牛が斃れたとき斃牛馬として「穢多・非人身分」によって解体処理された。この場合、農民と「穢多・非人身分」間の斃牛の移動に、どんな所有形態の変動があったのか、などなど。

部落史のほんの一端であるが、このような問題を考える中で私は「部落学」という学問・科学領域が必要なのを主張してきた。

このような発想があって「部落学」をテーマに据えた後、私は毎年講義の初めに「部落学について」というペーパーを学生に配布した。本稿の「まとめ」に代えてそのペーパーを学生に配布するのと同じ意味で無修正で載せること

とする。

## 部落学について—まとめ

部落学、それは日本文明あるいは日本文化の基層を読み解く重要な鍵である。

部落学とは、これまで部落問題として歴史学、社会学、民俗学、心理学などで研究されてきた分野である。それぞれの分野で大きな成果をあげてきたのであるが、しかしそれぞれの分野はそれ自体として部落問題の全体像を把握することはできなかった。そして、この問題を本格的に研究すると、それぞれの分野に分散されて、まとまりがつかない結果をもたらす。そのため部落学の分野が必要となる。

これまで部落問題は人権問題として取り組まれることが多かった。そこでは部落問題の中にある差別を克服し解決する目的が置かれており、その課題は今後も大切である。

しかし人権問題は他にもさまざまな要因のもとにおこっており、それらすべての中では「差別はいけない」とするステレオタイプで終ることが多い。人権問題の解決は必要であるが、それはそれぞれの要因の特性から解決の道が発見されることが望ましい。少なくとも多くの研究分野にまたがる部落問題は、その多彩な内容を豊さと捉え、その内部から生まれる新しい認識によって解決の道が模索されるのが望ましい。また多彩な豊さは差別だけに収斂できるものではなく、積極的な意味をもつ研究課題として、あるいは学問分野として把握されるべきであるし、それに応える十分な内容をもつ。

文明と文化について次のように考える。文明は自然と人間の接点にある人間の側の道具、装置、制度など、あるいは全システム。文化はその内側にあっ

て人間の精神にかかわる造形、価値である。

以上のように考えると、これまでさまざまな分野で研究されてきた部落問題は、文明・文化の概念によってはじめて総体化され、カテゴリー化することが可能なのがわかってくる。具体的にいうなら、部落問題は歴史的に、日本人のあいだでケガレ＝カオスと思われる諸事象に直接対応し、その諸事象の再生・処理を行ってきた人々への社会的対応（制度や文化的システム）の問題である。この時、制度のひとつとしてケガレ＝カオスに触れた人はその人もケガレとする観念＝触穢意識と、ケガレを忌避する制度が前提となって排除・差別の対象となってきた。

しかしこれを世界史的にみると、カオス＝ケガレの諸事象（動物や人の出血・病・死、天変地異、人の世界の規範破りなど）に直接触れ、それに挑戦してこそ文明・文化が生まれたのである。これは否定しようのない事実であろう。

このような視点に立つと、部落問題こそ、日本人の文明・文化の創造の、その基層を具現してきた分野といえるだろう。そしてまた、これまで人権問題として取り組まれた差別克服も、こうした視点による新しい認識によって、解決の第一歩を踏み出すことができる考える。

こうした理由によって部落学をうち立てる。

二〇〇一年四月

【立教大学・全学共通カリキュラム（総合教育科目）「日本文化の周縁」のテーマとして「部落学」を立ち上げる】

かわもと よしかず  
（本学兼任講師）